

上智大学 文学部国文学科教授 三田村先生
演題 「源氏物語の『今日』をよむ」(講演概略)

源氏物語が千年の時を経て、どのように読まれてきたか、現在の訳を参考にし、現在の若者がどのように読んでいくのかをみていきたい。

源氏物語の冒頭の解釈について

冒頭文の「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」がどのように解釈できるのかについて。

・藤井貞和氏の解釈

「かならずしもいい文章ではない。いいたいことへの熱量の文章の構造を歪めているような印象がある」と述べている。「大変愛された人がいた」でいいところを、「その女性の身分がそれほどでなかった」という情報が付け加わって文章がねじれていると藤井は指摘する。それほどまでに、この女性(桐壺更衣)の身分に関する情報が大切なものであったことを語っているという。

・三田村の解釈

源氏物語の冒頭文は、桐壺更衣を身分から紹介しているところに特徴がある。「いとやむごとなき際の」「際」は生まれた時の位置を表している。「それほど大した身分ではない方」と部分否定を用いながら、低い身分ではないが、ものすごく高い身分でもないという微妙な人物設定をしている。このことは更衣の生んだ皇子が最終的に親王になれなかったこととつながっている。さらに、この文章では、敬語表現を用いながら周囲との身分差を述べている。日本の古典文学では敬語をどう使いこなすかで身分差を表しているのが必要などである。それまでの物語は、親の系図や本人の美醜から始められることが多かった。ところが、源氏物語では系図は一番には語られず、本人の美醜も告げず、まず更衣の微妙な身分を告げることに意を用いている。

・三谷邦明氏の解釈

天皇は后妃たちを身分によって后を愛することが当時の常識であった。ところが桐壺帝はその暗黙の掟を破っていると描かれる。

いづれの御時にか・・・の本文から読み取れることは、この天皇に人望があることである。人気のない天皇には妃が少ない。さらに中宮がまだいないらしいことで、帝を取り巻く環境に絶対権力者がおらず、権力の帰趨が明らかになっていないことを示している。

以上のことから、三谷邦明は源氏物語のテキストは「なぜ」という疑問をもって読むことが大切だと述べる。

・「なぜ」を求める文学

「いとやんごとなききはあらぬが」からはどの程度の家柄か「すぐれてときめきたもうありけり」からなぜ一人の女性だけが愛されたのか、という疑問が喚起される。読者もまた、「なぜ」と問いかけて、みづからその答えを模索していくのが源氏物語の文体だと三谷氏は考える。

普通であれば桐壺更衣がどのような容姿の女性なのかを説明をするが、源氏物語はただ、寵愛されただけだと結果だけをかく。西洋の小説の考え方だと近代小説の語り口として指摘されていることと同じである。E・Mフォスターの『小説の位相』によると、古代の物語は出来事を因果関係でかたるが。近代小説はなぜか、を読者に問いかけているとされる。源氏物語のありようは千年前に近代小説的な書き方を試みたものと言える。そこでは読者は単に受け身で物語を享受するだけでなく、共に考えていくことで、読みを切り拓いていくのである。

なぜという問いかけにあわせて物語が展開されていくので、非現実的な物語展開ではなく、現実には納得できる展開が用意されている。

・更衣の容貌描写

光源氏の容姿については述べているのに桐壺更衣に関しては述べられていない。桐壺更衣の美貌は、亡くなった後の帝の「らうたげ」などの主観的な回想で、ようやくイメージされる。

桐壺更衣の美しさは生前はまったく語られない。更衣がなくなった後帝の主観を投影したかたちで回想され、失った人をどれだけ切実に思っているかを表現している。竹取物語では登場人物を語り手が規定し、総括して語っている。源氏物語は人物像のすべてを語らない。部分的な印象の重ね合わせの中に人物が浮かぶように配慮しているのである。

・源氏物語の現代語訳と翻訳

昭和13年源氏物語が初めて国語の教科書に掲載された。この年、与謝野晶子。谷崎潤一郎によって現代語訳が相次いで刊行された。この年イギリスの詩人アーサー・ウエイリーによって英訳されたことが、現代語訳を促したきっかけであろう。

・わかりやすい訳の仕方について

「からである」「せいである」など前の文章が後の文章を説明しているのが与謝野晶子の訳。

谷崎潤一郎・瀬戸内寂聴のそれぞれの特徴ある訳の説明。

・段落について

瀬戸内訳は段落を多くしすぎて原文の息遣いを明らかに損なっているところがある。お

そらくわかりやすさ重視の出版社の姿勢の反映だろうが、残念である。

- ・ 橋本治の『窯変源氏物語』

橋本は身分の違いがもたらす女性の扱いに敏感で、啓蒙的かつ、体系的に平安時代という時代を捉えている。授業の場では参考となるすぐれた訳の試みと言えよう。